

# 『聖フィラレトス伝』研究序説

中 谷 功 治

## 一 はじめに

ビザンツ帝国史において八世紀から九世紀前半に起こったイコノクラスムは、結果として数多くの聖者伝著作 Hagiography を生み出すことになった。ブルベイカーとハルドンによるイコノクラスム期についての史料研究では、合計で一〇五の聖者伝に関連する作品に検討が加えられている。<sup>(1)</sup> この時代はビザンツにおける聖者伝執筆の一つの画期であったといえるだろう。

このイコンをめぐる論争はビザンツ社会にも多大な影響を及ぼし、世俗教会だけでなく修道世界にも激動期を到来させた。イコノクラスト皇帝たちによる迫害は、無視できない数の聖職者や修道士たちの運命を翻弄し、彼らに殉教や受難の機会を提供する結果となった。<sup>(2)</sup> 論争が展開された時期とその直後に執筆された聖人伝の多くは、このイコノクラスム運動と少なからぬ関連性を有していたのである。

本稿が取り上げる『聖フィラレトス伝』<sup>(3)</sup> が執筆された九世紀前半もまたイコノクラスムが展開されていた時期に相当する。フィラレトスの伝記は、同じくこの時期に書かれた『小ステファノス伝』(イコンをめぐって皇帝コンスタ

ンティノス五世と対立し、殉教を遂げた修道士が主人公）と並ぶ著名な作品であり、これまで多くの研究者たちの関心を引いてきた。

『聖フィラレトス伝』が注目された理由としては、その内容のユニークさに負うところが大きい。修道士の小ステファノスの場合とは異なり、フィラレトスの伝記にはイコンやそれに関連した文言が登場することは皆無に等しい。このことを根拠にして、この伝記はイコン破壊派に属する人物の手になる作品である可能性が高いと指摘されてきた。<sup>(4)</sup> 八四三年にイコン派が最終的に勝利した後、イコノクラスムを支持する言説は、これを反駁するために教会会議の議事録などに引用される場合を除き、その一切が「記憶の抹消」の措置を受けている。それだけに、もしもフィラレトスの伝記が正統派とは違う系統の出自を持つとなれば、その存在価値は貴重なものであるといえる。

キリスト教を国教とするビザンツ社会にあつて、崇敬の対象となる人物には一定の傾向が見られた。世俗教会が特に重要視したのは高位聖職者として徳や誉れの高かった人物である。例えば、七八七年のイコン復活に尽力したコンスタンティノーブル総主教のタラシオスであり、八一五年のイコノクラスム再開に反対して解任された同じく総主教のニケフォロスである。この両名は総主教就任以前は俗人の国家官僚であつたが、通常の教会組織に所属していた人々も何人が登場する。アマストリス主教のゲオルギオスやシユンナダ主教のミカエルらの名前を挙げる事ができるだろう。

さらに、修道世界に生きる修道士たちも列聖の有力な候補であつた。先述の小ステファノスに加えて、年代記作者として名高い聖証者のテオファネス、そして修道制やイコン神学において巨大な足跡を残したストウディオス修道院長のテオドロスらである。

ところがフィラレトスはこれら二つの大きな範疇には属していない。彼はその生涯を通じて妻子を持つ俗人のまま

であった。キリスト教世界にあっては、俗人であっても聖人として崇敬を集めるケースは珍しくはないが、この時代のビザンツ帝国においてはイコンの復活に功績のあった皇太后（後の女帝）エイレネーや同じくテオドラなどの皇族、そしてイコン破壊に身を挺して抵抗したとされる伝説上の人物テオドシアなど女性が目立っている。<sup>(5)</sup> フィラレトスの場合に注目されるのは、イコン問題を除外しても、彼が取り立てて信仰心に厚く、それゆえに神の特別な寵愛を受けたというような表現が伝記にはあまり登場してこない点にある。

さらに作品の文体においても『フィラレトス伝』はユニークな存在であるといえる。シェフチェンコによれば、この時代の聖人伝の記述スタイルは、ビザンツの他の文学ジャンルと同様に、大きく「高・中・低」の三つに分類できるといふ。すなわち、古典作品からの引用をちりばめ、修辭的に見て高度に洗練された「高い」スタイル、これとは逆に修辭的には稚拙ではあるが、素朴で生き生きとした内容を持つ「低い」スタイル、そして両者の中間にあって、ある程度の修辭的な技巧を凝らすことを目指した「中間」スタイルである。<sup>(6)</sup>

今日、『聖フィラレトス伝』はジェノヴァ本とパリ本の二系統の写本で伝わるが、通説では前者がよりオリジナルに近く、後者は後世の、おそらくは一〇世紀の改作だとされている。<sup>(7)</sup> この内、前者のジェノヴァ本の伝記は、イコンクラスム期における聖人伝の中で、唯一「低い」スタイルで書かれた作品なのである。そしてその後は、改作されたパリ本（「中間」スタイルで記述）も含めて、ビザンツの聖者伝記述からはフィラレトス伝のような「低い」スタイルの作品は姿を消すことになった。<sup>(8)</sup>

したがって、オリジナルの『聖フィラレトス伝』は、上流階層に属する読者向けの可能性をもつ「高い」レベルのものに比べて、より「民衆的な」作品であったといえる。また、この二つの写本系統には、その内容面でも少なからぬ違いが見られる。改作されたパリ写本では、フィラレトスの家族についての記述は大きく省略され、体裁を整える

ための短めの前書きが付加されている。<sup>(9)</sup>

以上、フィラレトスの伝記は成立の背景、主人公、文体などの点において非常にユニークであることがわかった。けれども、この作品はその内容面においてもきわめて興味深いものとなっている。次章では、フィラレトスの孫、修道士ミカエルによって執筆された記述、かつてシュペックが「ビザンツ文学において最も美しい作品のひとつ」と呼んだ『聖フィラレトス伝』のあらましをたどることにしたい。<sup>(10)</sup><sup>(11)</sup>

## 二 『聖フィラレトス伝』

作品に前書きはきなく、単刀直入に「パフラゴニア人の地にフィラレトスという人がいた」というフレーズで始まる。彼は資産家で、父親から受け継いだ多くの家畜と近隣地域に四八か所の地所、そして大きな館を所有していた。その一方で、彼は気前のよさでも有名であった。いつも貧しい人々に惜しみなく財産を分け与えることから、その名は「この地域だけでなく全東方に」(26-27) 鳴り響いていたという。

けれども、悪魔から妬みを受けたフィラレトスは、試されて貧困への道を歩むことになる。ある時は侵入したイスラーム教徒によって略奪を受け、またある時は隣人たちによって土地を奪取され、彼は次々とその財産を失っていった。結局、彼には雄牛がいくびき、馬とロバが一頭ずつ、乳牛と子牛、男女一人の奴隷(ハム)、二五〇の蜜蜂の箱(284, 352) だけが残されることになった。

しかし、フィラレトスは自身の運命を嘆くことなく、これまでと変わることなく、いつも気前よく残った持ち物を人々を分け与え続けた。雄牛は動物が死んだ農民に、馬は召集を受けた戦士に、といった具合である。

例えば、飢饉が起こった時、貧しくなったフィラレトスは遠方から穀物をロバに積んで持ち帰らねばならなかった。ところが、戻ったところで出会った物乞いに穀物をせがまれると気前よく分け与える。それがあまりに多いため、男が一度にたくさん運ぶことができないのを見て、妻のテオセボがロバも一緒に与えたらどうかと皮肉混じりに言うと、フィラレトスはそれは妙案とばかりに物乞いにロバも与えてしまう(285-321)。妻はいつものようにため息をつき、あきれはてて沈黙するのであった。

彼の行いはきまつて妻の機嫌を損ねるのだが、しかしその苦言はいつも裏目に出る。ある時、聖人が子牛を農民に与えようとする、妻はそれでは子牛を母牛と離ればなれにしてしまいかわいそうだと言う。するとフィラレトスは、これに答えて母親の雌牛をも農民に与えてしまう。こうしてフィラレトスは屋敷と家族以外のすべてを失うことになった。

しかし、ここで物語は新たな展開を見せる。「その時、キリストを愛するエイレーネーが彼女の息子、皇帝コンスタンティノスとともに統治していた」(376-377)と記され、ここではじめてフィラレトスが生きた時代が明らかとなる。

皇太后エイレーネーは、息子コンスタンティノス六世(在位七八〇―七九七年)に花嫁を見つげるために使者を「ローマ人の土地全体」に向けて派遣した。「西、南そして北の全て」(379-380)を捜した後、一行は黒海南岸のポントス地方、フィラレトスが暮らすパフラゴニアのアムニアという村に到来する。

宿を取ろうとして聖人の大きな屋敷に目を付けた国家の役人たちに対し、村の住人たちはその中味は空っぽだと忠告するが、彼らは屋敷は古くて堂々としていたため滞在することに決める。フィラレトスは訪問者たちを歓迎し、妻が食事に出す物がないと抗議するのをよそに、主が提供してくださるだろうと返事をして、食卓の支度をさせる。

すると、驚くべきことに村の長老たちが彼のところへ牡羊、鶏、鳩、ワインを持参し、妻の調理により晚餐は無事執り行われる。

使者たちは聖人の家族について尋ね、彼の長女に年頃の娘が三人いることを知ると、自分たちの旅の目的を説明し、彼女らに会わせてくれるように求めた。フィラレトスは、客人たちに今晚は旅の疲れを取って休息するようにと述べ、求められた会見を翌日まで引き延ばす。朝になり再び孫娘たちに会わすようにせがまれると、「我々は貧しいかもしれないが、娘たちは寢室を決して離れたことはなかった」(456-457)と胸を張りつつ、フィラレトスは一行に家族の若い女たちを披露する。

女性たちは全員が非常に美しく、皇帝の役人たちは聖人の娘と孫娘たちを区別するのに助けを求めなければならぬほどであった。三名の孫娘の内、年長のマリアの身長、足のサイズを計り、理想の人物像と比較し、使者たちは彼女が皇帝候補の規格に完全に当てはまっているのを見出す。

こうして、三名の孫娘たちが若き皇帝の妃候補となったため、一家全員が首都コンスタンティノープルへ向け出発することになるが、ここで幕間的にフィラレトスの子どもたちや孫たち全員の紹介がなされる。フィラレトス夫婦一家には、長男夫婦と彼らの子ども七名(その一人が作者ニケタスである)、夫と死別していた長女には妃候補となったマリアを含めて三名の娘と一名の息子、次女夫婦にも六名の子どもがあり、合計で二〇名を越える大きな家族を成していた。

そして、いよいよ話は都での「皇妃コンクール」の場へと移る。都には他に十名の候補者たちが選ばれ、同じく皇帝の下へ連れてこられていた。けれども、他の若い女性たちは皇帝コンスタンティノス六世とその母エイレーネーの前に進み出ると、その全員が拒否されてしまう。これに対して最後にフィラレトスの孫娘三名が登場すると、彼女ら

の美しさに驚き、その知性、衣装そして物腰があまりに印象的であったため、即座に長女マリアが皇帝の妃に選ばれた。残った妹二人もそれぞれパトリキオスの爵位を持つ高貴な人物とランゴバルド王と婚約することになった。

コンスタンティヌス六世とマリアとの婚約が決まると、皇帝はフィラレトスたち一族の者に宮殿近くに豪華な屋敷を提供し、さらに彼らを晩餐に招き、一人一人に高価な贈り物を気前よく与えた。これに対し、フィラレトスは彼の近親者を集めて、次の日に自分は皇帝とパトリキオスと元老院全体を自宅へ招くつもりなので、宴会の準備をするように彼らに命じる。しかし家族が大急ぎで支度した会食に、フィラレトスがゲストとして招いたのは大勢の物乞いちであった(539)。ここに、皇帝家とのつながりにより大きな威信を獲得しても、相変わらずフィラレトスは貧しい人々へのその気前のよさを失うことがなかったことが判明する。

食事が終わると、フィラレトスは親族全員に命令して、卓上に彼らが皇帝から受け取った高価な贈り物全てを置かせた。彼は言った「私はお前たちに約束した隠されたお金を与えたのだ。お前たちは私に何か言うことがあるか」(572-574)。一族の者たちは、かつて貧困化のさなか、隠れたところにお金はある、と発言するフィラレトスをあざ笑い、彼の行動を理解せず愚かにも怒ったことに恥入り、床に額ずいて彼に赦しを請うた。もちろんフィラレトスはすべてを赦し、祝福を与えた後、物乞いたちには二四ポンドの黄金を与えた。

孫娘の結婚後フィラレトスは四年間生きたが、彼は困窮した人たちへの世話を続けた。彼はいつも三つの財布を付き人に持たせたが、一つは金貨で、もう一つを銀貨で、三つ目を銅貨で満たしていた。物乞いが施しを求めるとフィラレトスは三つのうちの任意の(神が決めた)財布を取り出して与えた。この間、宮廷に出入りしたにもかかわらず、彼は比較的下位の爵位であるヒュパトス(ラテン語のコンスル)のみを帯びただけで、身なりでも決して絹の衣装をまとうことはなかったという。

やがて、死期を悟ったフィラレトスは、首都にあるクリシス女子修道院の院長を訪ねて自分の墓を買い求める。間もなく死の床についた彼は、近親者を呼び集めて別れを告げる。その際、彼は長男の子どもたちの将来を予言した。長男ヨハネスの長子バルダスは七人の子宝に恵まれるだろう、次男エウスタティオスと四男フィラレトスは夭折するので心づもりをしておくように。三男で本作品の著者でもあるニケタスは修道士となるだろう。そして誰よりも長生きをするので、亡くなった一族の人々のために祈念するように。二人の孫娘ヘレナとエウフェミアも修道院へ入ることになるだろう。

妻と他の子どもや孫たちにも別れを告げ、祝福を与えた後、フィラレトスは死去する。彼の亡骸は、皇帝母子や皇后にして孫娘のマリア、そして全元老院が列席する中、クリシス修道院へと運ばれ、悲しみの中で埋葬が行われた。

フィラレトスの死の日から三日後、孫のニケタスは夢を見る。その中で、彼は火のように激しく唸り声を立てる川の前に立っていた。川の向こう側には楽しい庭園があり、そこには実いっぱいザクロの木々、大きく成長して果実をつけたすばらしい葡萄の蔓、巨大なナツメヤシやヘーゼルナッツの木々があつた。白い服を着た男たち、女たち、そして子どもたちがその果実を食べていた。ニケタスは庭園の木々の真ん中に祖父を見出す。彼も同じく白い衣装で、ニケタスの妹で最近死んだヒュパティアを膝の上に乗せ、王座の上に座っていた。二人の周りには、新たに洗礼を受けた子どもたちの大きな群れが取り巻いていた。

フィラレトスの側には、別の一群の白い衣装の人々がいたが、彼らは聖人が生きている時に助けの手を差し伸べて助けた貧者たちであった。黄金の杖を手にする輝く容姿をした男がニケタスに説明をする、「汝の祖父は今やアブラハムとなった」(870-871)のだと。それゆえ、これら全ての白い衣装の人々は、いわばフィラレトスことアブラハムの胸で休んでいるのだと。豊かに実ったたくさんのお菓子はフィラレトスが前もって貧者たちの支援を得て楽園に送



った富を表していたのである。

フィラレトスはニケタスにもこっちへ一緒に来るようにと合図を送る。しかし、ニケタスは躊躇する。というのも、深くて流れの激しい川には一っだけ橋が架かっていたが、「その橋は髪の毛のように狭かった」(874-875)から。しかし、フィラレトスの励ましを受けて彼は恐れつつも、よろめきつつ川を渡り始める。けれども、渡り終えたその瞬間にニケタスは現実に引き戻される。それは彼が怖さのあまり泣き呻いていたため、母親が起こしたのであった。

物語の末尾には後書き<sup>エピローグ</sup>(892-913)が置かれており、筆者ニケタスのその後が述べられている。彼は祖父の言いつけを守りつつ十年間を一家の屋敷で過ごした後、一八歳で家を出て修道の道に入る。それから二〇年後、ペロポネソス半島の南部のカリウポリスにおいて、追放の身としてこの物語を書いたとある。この記述には、自分自身の体験と両親からの話、そして貧者たちから入手した情報が元になっているという。

夫に先立たれた聖人の妻テオセボは、ある時、残された財産をもって故郷のアムニアに戻り、荒れ果てた教会をすべて再建し、新たに修道院を設立して首都コンスタンティノープルに戻った。その後、平和に暮らした彼女は夫の隣に埋葬されたという。

### 三 内容についての考察

『聖フィラレトス伝』は大きく二つの部分から構成されていることがわかる。すなわち、パフラゴニアのアムニア村における主人公フィラレトスと彼の家族の生活が舞台となるのが第一部である。豊かな財産の大半を失い、貧困化

した中でフィラレトスがとった気前のよさが、興味深いいくつかのエピソードとともに語られる。第二部では、ビザンツ版のシンデレラ物語、聖人の孫娘マリアの皇帝コンスタンティノス六世の「皇妃コンクール」への参加と、その勝利が記されている。ここでは、貧困の極みから帝国の都での栄光へと、話はまさに劇的な展開を見せる。そして第三部は、聖人フィラレトスの残された生涯と孫ニケタスが夢に見た幻影などが語られる。自分の持つ富の大きさに関係なく、フィラレトスの変わることのない寛大さ、その徳の高さがさらに明白なものとなるのである。

カジユダンは以上のような物語の展開について、それぞれ自己完結した三つの部分が、テーゼ、反テーゼ、合テーゼという弁証法的な構成を成しているという<sup>(12)</sup>。スタイル上において修辭的な巧妙さを欠いてはいるものの、読者を飽きさせることのない、文学的に見ても興味深い作品ということができらるだろう。

そもそも『聖フィラレトス伝』においては、通常の聖人伝に見られるような著者による執筆に至る経緯などを記した前書きは存在せず、いきなり主人公の紹介「パフラゴニア人の地にフィラレトスという人がいた」で始まる。また、通例ともいえる主人公の出生や生い立ち、そしてその両親についての詳しい記載も欠落している。すでに、最初に登場した時点でフィラレトスは妻子を持つ大人として登場する。書き出し部分において、この伝記は他の聖人の伝記とは異なっているのである。

けれども、第一部の書き出し部分はキリスト教徒にとってはなじみ深いものであった。というのも最初の文章、そして悪魔の妬まれての試練という展開は、旧約聖書の『ヨブ記』とそっくりであったからである<sup>(13)</sup>。

『ヨブ記』は「ウツの地にヨブという人がいた」という文言で始まる。ヨブは多くの子どもたちと「らくだ三〇〇〇頭、牛五〇〇くびき、雌ロバ五〇〇頭の財産」を持つ「東の国一番の富豪」(1. 13: 新共同訳より)であったが、フィラレトスも同様にたいそう裕福であり、「牛六〇〇頭、雄牛一〇〇くびき、雌ロバ八〇〇匹、馬とラバ八〇鞍、

羊一二、〇〇〇匹」(8-11)を所有していた。著者である孫のニケタスは、悪魔がフィラレトスの徳のある振る舞いについて、「かつて彼がヨブを妬んだように妬んだ」(34-35)と記している。

しかし、聖書でのヨブの運命が悲劇的な展開を見せるのに比べ、フィラレトスの周囲で展開する物語はけっして悲惨なものではない。むしろ喜劇的でさえある。ヨブは自分の財産のみならず子どもたちも失い、病気になって数え切れない種類の苦しみに喘ぐことになり、ついに彼の口からは嘆きの言葉が発せられる。これに対し、『聖フィラレトス伝』にそのような悲惨さはなく、貧困化が進む中でも主人公は何ら変わることなく一家の家長であり続ける。伝記からうかがえるのは、素朴で「幸福な愚者」<sup>(14)</sup>ともいえるフィラレトスの姿であり、読者を驚かせるのはただ一つの徳、彼の信じがたいまでの気前のよさだけであつた。フィラレトスは自分に残された最後の持ち物さえも「喜んで」(238; 254-255)与えてしまうのである。

ひよつとすると、著者ニケタスは、自分の作品を聖書のヨブとより明確に対比できるように配慮をして、そして零落したフィラレトスがそれでも慈善的な贈与をやめなかつたことを強調するために、彼が非常に裕福であつたと記述することでその物質的な凋落を劇的に表現しようとしたのかもしれない。

フィラレトスの出自について、彼は高貴な身分の大土地所有者であつたのか、それともあくまでも裕福な農民の息子であつたのか、これまで何度か議論がなされてきた。残念ながら、著者のニケタスは幼くして故郷を離れてしまつており、記述の内容は伝聞あるいは想像の中のものである可能性も高いだけに、記述の中に事実を積極的に読み取るのはやはり困難である。アムニア村が位置するパラゴニア地域の行政の中心地のガングラ(38)を除いて、このあたりの地名は一切言及されず、フィラレトスの寛大さの受益者も、彼を助けるために登場する人々も、すべてが田舎に暮らす多かれ少なかれ農業に従事する人々の域を出ない。コンスタンティノープルに一家が移動するまでは、伝

記は完全に何の変哲もない村落の記述に終始しているかの如くである。

大きくて古い屋敷と多くの土地を所有し、孫娘が皇帝の妃となるこの物語の主人公は、やはり支配階層アリステクラシーに属していたのではないか、との主張がしばしばなされてきた。しかし、本文に見られる「良き生まれの」(9) という用語は、聖者伝テキストにおいては、何よりもまず高い道徳的な見地から見ての意味である。父親のゲオルギオスという名前についても、テキストは素直に「耕作者」という職分に応じたもの、と受け取るのが無理がない。フィラレトスの中に、パフラゴニアのアムニア村の住人にして裕福な農夫ゲオルギオスの息子、という以上の存在を見ることは史料的にいつてかなり無理があるようである。実際、伝記に登場するフィラレトスは大地を耕し、雄牛を扱う方法を知るような人物であった。<sup>(15)</sup>

フィラレトスの出自が余り高くないことを予想させる傍証としては、マリアの結婚後に彼の一族の男たちが帯びた爵位が参考になるだろう。フィラレトスはヒュパトス以上のいかなる高い地位をも受け入れることを拒否し、彼の息子ヨハネスと孫のペトロナス(皇妃マリアの弟)はスパタリオスという比較的低い爵位のみを得たという(531-535)。これらは記述にあるようなフィラレトスの謙譲というよりは、彼らの出自によるものと考えていいのではないだろうか。もちろん、権勢欲の強い摂政エイレーネーが、皇帝家の外戚に大きな力を授けたくなかった、という可能性は残るけれども。

第二部は、マリアが皇帝コンスタンティヌス六世の妃に選ばれる過程、いわゆる「皇妃コンクール」を話題の中心として、物語はドラマティックな展開を見せる。

マリアの登場については、主要史料である『テオファネスの年代記』(伝記と同じ九世紀初頭の成立)には、「皇太后エイレーネーはアナトリコイテマからアムニア出身のマリアという名の娘を連れてきて、自分の息子で皇帝のコ

ンスタンティノスと結婚させた<sup>(16)</sup>とあるだけであり、「皇妃コンクール」の話を事実として受け入れるのはためらわれる。ところが、類似の皇帝の妃選びのエピソードが年代記や聖人伝を中心に、その後九世紀の間に四回にわたってビザンツ史のテキスト上に登場する。エイレーネーから篡奪して皇帝位に就いたニケフォロス一世の息子で共治帝のスタウラキオス（単独在位八一年）の妃テオフアノ、テオフィロス帝（在位八二九―八四二年）の妃となるテオドラ、その息子ミカエル三世（在位八四二―八六七年）とデカポリスのエウドキア、そしてミカエルの息子の可能性の高いレオン六世（在位八八六―九一二年）の妃テオフアノの場合がそれである。

このように複数の記述において確認がとれることを踏まえて、「皇妃コンクール」がビザンツ帝国のある時期に実際に開催されていた、という可能性をめぐって論争がなされてきた。現時点では、存在に否定的な見解が多数派をなしているようにも見えるが、最近ではトレッドゴールドおよびわが国で古くから『聖フィラレトス伝』に注目してきた井上浩一氏は「皇妃コンクール」は実在した、との立場を取っている<sup>(17)</sup>。

第二部の記述と関連して述べておくべき事柄として、皇后マリアのその後の運命がある。というのも、フィラレトスがマリアの結婚後四年の七九二年に死去したこともあり、伝記はその後のマリアについては沈黙しているからである。

マリアを待ち受けていた運命は過酷なものであった。皇帝コンスタンティノス六世とマリアとの間には後継者となる息子は誕生せず、エイレーネーとエウフロシユネーという二人の娘が生まれたが、子どもたちは間もなく皇族としての生活を離れることになった。原因は夫コンスタンティノスの変心である。七九五年、皇帝は宮廷女官のテオドテと懇ろな仲となり、教会法を無視してマリアとの離婚を断行し、テオドテと再婚したのである。この事件は「姦通論争」として、ストウディオス修道院長テオドロスとの間に激しい論争と対立を招く原因となる<sup>(18)</sup>。

ともかく、マリアと娘たちはマルマラ海のプリンキポ島の修道院に送られることになった。さらに七九七年には、このスキヤンダルで人気を落としたコンスタンティノス六世は、母親エイレーネーとの権力争いに破れ、視力を奪われて皇帝位を失う。やがて八〇二年に女帝のエイレーネーが失脚すると、レオン三世以来のいわゆるイサウリア王朝は断絶することになった。

本伝記とイコノクラスムとの関係についてもコメントしておこう。先に述べたように、『聖フィラレトス伝』は研究史において非イコニック的、あるいはさらにイコノクラスム的作品との評価を受けてきた。<sup>(19)</sup> 実際、この時代に書かれた聖人伝の多くがイコニック問題に関連していることが多いのに対し、この伝記にはイコニックは一切登場していない。アムニア村に皇帝使節が到来する頃に起こった大事件であるイコニック復活（七八七年）について作者ニケタスは一切触れていない。また、伝記の中で彼が言及する聖書の記述も、イコニック破壊派の場合と同様に旧約聖書の内容が中心である。さらに、金銭に目が眩んだ貧者たちの振る舞いを非難する際に、フィラレトスは「貪欲と偶像崇拜」(63) という言葉を使っているが、「偶像崇拜」という非難はイコノクラストたちの常套とする文句であった。

ただし、以上はいずれも間接的な証拠にすぎないだけに、『聖フィラレトス伝』を反イコニックな伝記であったと断定するのは危険だとの意見もある。<sup>(20)</sup> イコニックへの言及を避けている傾向がある一方で、著者ニケタスはイコニックを復活させたエイレーネーのことを「キリストを愛する」皇后として賞賛しているものである。

最後に、『聖フィラレトス伝』の書かれた背景について考えておきたい。<sup>(21)</sup>

伝記の末尾にある後書きからは、孫でこの伝記の著者であるニケタスは、幼少の頃にマリアの結婚（七八八年）のために一家とともにコンスタンティノープルに移住し、フィラレトスの死（七九二年）の一〇年後、一八歳で修道士となり、それから二〇年の歳月を経て<sup>(22)</sup> 『聖フィラレトス伝』を書いたことが判明する。ニケタスは、作成時にペロポ

ネロス半島南部のカリウポリスに追放中の身であったというが、いつどのような理由で追放となったのかについては述べていない。イコノクラスム論争が関連している可能性は残るものの、一切の証拠は欠落したままである。

ただし、時代状況からある程度の推測は可能である。作成の日時は、マリアの娘であるエウフロシユネーが長年の修道生活を離れ、篡奪帝であるミカエル二世（在位八二一―八二九年）と結婚した時期にほぼ一致している（通常は八二三年とされるが、前年の可能性もある<sup>(23)</sup>）。そしてそれは七世紀後半から九世紀初頭にかけて頻発したテマ反乱の最後にして最大のもの、スラヴ人トーマスの乱が勃発した時期とも重なっていた<sup>(24)</sup>。宮廷クーデターで帝位に就いたミカエル二世は、政権基盤を安定したものとするために、自らの立場を正統化する必要性を痛感したようである。つまり、イサウリア朝の正統な皇帝コンスタンティノス六世の血を唯一受け継ぐ人物、彼とマリアの娘エウフロシユネーとの繋がりを求めたのである。

ジェノヴァ写本の校訂編者のリデンは以下のように推測する。ニケタスが作品を書いたのがエウフロシユネーの結婚の前であったか、後であったかは不明である。もしも前者ならば、伝記はおそらくはミカエルの結婚を支持する形で役立っただろう。後者ならば、伝記はいわば結婚の贈り物を意味していたかもしれない。いずれにせよ、それは著者を追放から救い出すという目的にも同じく役立ったのではないか。不幸にして『聖フィラレトス伝』執筆後の展開については不明であるが、ありうることにように思える。ともかく、ペロポネソスに追放されていた修道士ニケタスが解放を望んでいたことは間違いないだろう。

ニケタスはスラヴ人トーマスによる反乱による国内政治の混乱というこの機会を捉えて、自分の祖父にかかわる物語を執筆することで、新たに皇后となる予定の（あるいはなった）エウフロシユネーが自分の祖父、パフラゴニア生まれの有徳者フィラレトスの孫娘であったことを訴えたかったのではないか。あわせて、自分の家族史の中の陰鬱な過

去を人々に忘れてもらうことも意図したのかもしれない。もしも、この『聖フィラレトス伝』がイコノクラスト皇帝であるミカエル二世の耳に届くことを意図した作品であったとすれば、その内容がイコンについての記述を欠いていたこともまた当然のことであった。<sup>(25)</sup>

#### 四 おわりに

『聖フィラレトス伝』に描かれた主人公フィラレトスは、通常ビザンツの聖人を特徴づける特質の多くを欠いていた。彼は苦行者でも隠者でもなく、単なる子どももいる妻帯者であった。彼は修道院や教会とも特別なコネクションを持たなかった。<sup>(26)</sup> また、彼は貧しい者たちへの底抜けの気前のよさ、財産への無頓着を終生持ち続ける一方で、皇帝家との姻戚関係から得られる「便宜」を表だつて嫌う素振りを見せたりもしない。

『聖フィラレトス伝』は修道士によつて書かれてはいるが、俗人を主人公とする世俗的な作品と呼ぶことができるだろう。彼は旧約聖書のアブラハムの如く、<sup>(27)</sup> 大きな家族の家父長として生涯を送った。彼の態度は概ね控えめであり、高価な衣装を避け平凡な服装を好みはしたが、記述にあるかぎりでは彼は普通に料理を味わつてもおり、取り立てて信心深いわけでもなさそうである。実際、作品の中でフィラレトスが「聖なる人」<sup>ハギオス</sup>と呼ばれる回数は十回程度と聖人伝としてはあまり多くない。

フィラレトスの周辺には、目を見張るような超自然的な力が働くこともない。伝記においては、明示的な形では奇跡は生じないのである。彼は何ら特別に禁欲的な生活を送つてはならず、苦行者とは似てもつかない存在である。フィラレトスに関して非人間的・超人的な要素を挙げるとすれば、ただひとつどんな苦境に陥ろうとも、不幸に陥る



ことなく、常に貧しい人々に喜びをもって気前よく持ち物を分け与えた、という点のみであろう。これらすべてはこの伝記に高いオリジナリティを与えている。<sup>(28)</sup>

『聖フィラレトス伝』では、聖人の伝記が本来備えているべき性質ともいえる啓発的な要素もまた希薄である。例えば、通常の聖者伝においては、慣例的な筋立てとしてしばしば見られる要素として「善と悪の戦い」がある。当然のこととして聖人は善の化身であり、彼の敵が悪の発現者となる。敵となるのは、ある伝記では皇帝であり、別の物語ではイスラーム教徒であったりする。ところが、『聖フィラレトス伝』には明確に邪悪な姿をした人物は登場しない。

むしろ読者は、単純かつ明快な徳である「気前のよさ」を軸に展開されるそのストーリーを存分に楽しめるだけに、作品はむしろ娯乐的と呼びうる形に仕上がっている。まさに伝記のオリジナリティは主人公フィラレトスのイメージにおいてより明確なものとなるのである。かつてポリヤコーヴァが示したように、フィラレトスは「幸福な愚者」という民俗学上の人物像に対してかなりの類例性を備えているといえるだろう。それは常識や通常の予見に反して行動し、社会秩序を逸脱し、そして最後にはその道德的優位性を示すような人物である。<sup>(29)</sup>

編纂物としての『聖フィラレトス伝』には、聖者伝記述という体裁を超えて、帝国の一地方に暮らすある家族の歴史的な要素、さらには民俗学の対象となるおとぎ話やシンデレラ物語にも通じるロマンス的要素が入り交じっているように見える。<sup>(30)</sup> 著者ニケタスは多くの文学的モチーフやモデルを活用した。『ヨブ記』、民話的要素が入った貧者たちへの施し、「皇妃コンクール」、コンスルによる贈与、楽園の幻影などである。彼がこれらのモチーフを独自に、そして巧みに処理したのは明らかであろう。内容の細部における一貫性は必ずしもしっかりしているわけではないが、しかしそれは他の多くの伝記にも見られる現象である。フィラレトスが巻き起こす数々のエピソードは元となったモチ

ーフの単なるコピーではない。

最後に、『聖フィラレトス伝』に描かれた世界はどれほど実際の歴史を反映しているであろうか。前述したように、記述された出来事の歴史性をめぐってはこれまで多くの議論が重ねられてきた。フィラレトスの出自や彼が所有した土地、それを取り巻く農村共同体との関係について、そして孫娘マリアがコンスタンティノス六世の婚約者に選ばれた「皇妃コンクール」の存在をめぐって。これらは額面通りに、あるいはある程度の割引をした上で受け入れて問題ないのであろうか。

もちろん、実在したと思われるフィラレトスという人物に関連して、いくつもの具体的な記述がある以上、その歴史性をまったく無視することはできないだろう。けれども、聖者伝記述としての性質に加え、民俗学的視点から注目されるメルヘン的な要素やスリルを感じさせる一連の劇的展開からは、まず『聖フィラレトス伝』は九世紀初頭のビザンツ社会が生み出したきわめて興味深い文学作品のひとつであることを踏まえておく必要があるだろう。聖人の伝記という作品形式の中での存在価値、その後の時代における改作作業の意味、読み手の変化の可能性など、幅広く分析を加えることを通して、歴史的なアプローチもより実り豊かなものになると考えたい。

注 (1) Brubaker, L. & J. Haldon, *Byzantium in the Iconoclast Era (ca. 680–850): The Sources: An Annotated Survey*, (Aldershot et al., 2001), pp. 206–232. この内、女性は一四名である。かつてパパダキスが博士請求論文で扱った主要な作品だけでも五三三を数える。Papadakis, A., *Iconoclasm: A Study of the Hagiographical Evidence*, Ph. D., Dissertation, Fordham University, (Ann Arbor, Michigan, 1968).

(2) ただし、聖職者や修道士への迫害について、ある程度の詳細が判明しているのは九世紀のイコノクラスム後半期についてである。拙稿「イコノクラスムの時代について―八世紀のビザンツ―」『待兼山論叢』(史学篇)、二六号、一九九

二年、六三—八七頁。

- (3) 正式なタイトルは「我が師父にして聖人たちの中にある慈悲深きフィラレトスの生涯と行状」である。
- (4) Ševcenko, I., "Hagiography of Iconoclast Period," in: Bryer, A. & J. Herrin (eds.), *Iconoclasm*, (Birmingham, 1977), pp. 113–132; Auzépy, M.-F., "L'analyse littéraire et l'historien : l'exemple des vies de saints iconoclasts," *Byzantinoslavica* 53, 1992, pp. 57–67; eadem, "De Philarète, de sa famille, et de certains monastères de Constantinople," in: *Les saints et leur sanctuaire : textes, images et monuments*, (Paris, 1993), pp. 117–135.
- (5) Kazhdan, A. P. & A.-M. Talbot, "Women and Iconoclasm," *Byzantinische Zeitschrift* 84/85, 1991/1992, pp. 391–408.
- (6) Ševcenko, op. cit., pp. 127–128.
- (7) Rydén, L., "New Forms of Hagiography : Heroes and Saints," *The 17th International Byzantine Congress, Major Papers*, Washington, D. C., 1986, pp. 537–554; idem, "The Revised Version of the 'Life of St Philaretos the Merciful' and the 'Life of Andreas Salos'," *Analecta Bollandiana* 100, 1982, pp. 485–495.
- (8) Ševcenko, I., *Observations on the Study of Byzantine Hagiography in the Last Half-century or Two Looks Back and One Look Forward*, (Toronto, 1995), pp. 3–20, esp. 16–17.
- (9) ペリシキ [BHG 1512] の校訂本について、ロズンクワントン・フンツェルとワシリエフ、A. A., "Житие Филарета Милостивого," *Известия Русского Археологического Института в Константинополе* 5, 1900, стр. 49–85 (text 64–86). 各々、フンツェルとワシリエフの著述に引く。Rosengqvist, J. O., "Changing Style and Changing Mentalities : The Secondary Versions of the Life of St Philaretos the Merciful," in: Høgel, C. (ed.), *Metaphrasis. Redactions and Audience in Middle Byzantine Hagiography*, (Oslo, 1996), pp. 43–58 を参照。ただし、両著者の関係については、その著述や各々の著述の意見も存在する。Cf. Kazhdan, A. P., *A History of Byzantine Literature (650–850)*, (Athens, 1999), pp. 281–291.
- (10) Speck, P., *Kaiser Konstantin VI. : Die Legitimation einer fremden und der Versuch einer eigenen Herrschaft*, 2 Bde., (München, 1978), S. 204.
- (11) 以下ではジェノヴァ写本 [BHG 1511 z] のリデンによる最新の校訂本をとり、その行数番号を提示する。Rydén, *The*

- Life of St Philaretos the Merciful Written by His Grandson Niketas. A Critical Edition with Introduction, Translation, Notes and Indices*, (Uppsala, 2002), pp. 60–118. Cf. Fourmy, M.-H. & M. Leroy, "La vie de S. Philarète," *Byzantion* 9, 1934, pp. 85–170.
- (12) Cf. Kazhdan, *op. cit.*, p. 283.
- (13) 実際、本文中でフィラレトスは「新コシモト」を語ったことがよくわかる (text 303)。<sup>○</sup> Cf. Rydén, *Life of St Philaretos the Merciful*, pp. 28–32.
- (14) Kazhdan A. P. & L. F. Sherry, "The Tale of a Happy Fool: the Vita of St. Philaretos the Merciful (BHG, 1511 z–1512 B)," *Byzantion* 66, 1996, pp. 351–362; Rydén, *Life of St Philaretos the Merciful*, pp. 33–36.
- (15) Nesbitt, J. W., "The Life of St. Philaretos (702–92) and its Significance for Byzantine Agriculture," *Greek Orthodox Theological Review* 14, 1969, pp. 150–158; Kaplan, M., *Les hommes et la terre à Byzance du VI<sup>e</sup> au XI<sup>e</sup> siècle*, (Paris, 1992), pp. 333, 483; Kazhdan, "One more Agrarian History of Byzantium," *Byzantinoslavica* 55, 1994, pp. 66–88, esp. 81 (review to Kaplin), pp. 89–95 (response of Kaplin); Winkelmann, F., *Quellenstudien zur herrschenden Klasse von Byzanz im 8. und 9. Jahrhundert*, (Berlin, 1987), S. 149; Rydén, *Life of St. Philaretos the Merciful*, pp. 26–28.
- (16) Boor, C. de (ed.), *Theophanis Chronographia*, 2 vols., 1883, Leipzig, vol. 1, p. 463.
- (17) Speck, *op. cit.*, S. 626–630; Treadgold, W. T., "The Bride-Shows of the Byzantine Emperors," *Byzantion* 49, 1979, pp. 395–413; Rydén, "The Bride-Shows at the Byzantine Court-History or Fiction?," *Eranos* 83, 1985, pp. 175–191; Hans, L. M., "Der Kaiser als Märchenprinz. Brautschau und Heiratspolitik in Konstantinopel (395–882)," *Jahrbuch der Österreichischen Byzantinistik* 38, 1988, S. 33–52; Hunger, H., "Die Schönheitskonkurrenz in 'Belthandros und Chrysantza' und die Brautschau am byzantinischen Kaiserhof," *Byzantion* 35, 1965, S. 150–158; Ludwig, C., *Sonderformen byzantinischer Hagiographie und ihr literarisches Vorbild*, (Frankfurt a. M., 1997), S. 113–145. 井上浩一「ビザンツ専制国家体制の確立と皇妃コンタール」『王権のコスモロジー』(弘文堂、一九九八年)三〇八–三三八頁、同「ビザンツ年代記の編纂過程と史料的价值」『人文研究(大阪市立大学文学部)』五〇巻、一九九八年、三三–三七二頁。なお、井上浩一著『ビザンツ帝国』岩波書店、一九八四年、四一–六頁も参照のしよう。

- (18) 拙稿「八世紀後半のビザンツ・エイレーネー政権の性格をめぐって」『西洋史学』一七四号、一九九四年、三六一—五三頁、同「ストウディオスのテオドロスと「姦通論争」(七九五—八一一年)」『西洋史学』一八六号、一九九七年、一—一九頁を参照のこと。
- (19) Sevcenko, "Hagiography of Iconoclast Period," pp. 126-127; Ludwig, *op. cit.*, S. 75; Auzépy, "De Philarète, de sa famille, et de certains monastères de Constantinople," pp. 117-135; eadem, "L'analyse littéraire et l'historien: l'exemple des vies de saints iconoclastes," pp. 57-67, esp. 58, 61-63.
- (20) Kazhdan, *A History of Byzantine Literature*, pp. 289-290.
- (21) 祖父のフィラレトスが名付け親であるというニケタスについては、他に言及する史料はない。Lilie, R. J. et al. (Hrsg.), *Prosopographie der mittelbyzantinischen Zeit. Abteilung I (641-867)*, 6 Bde., (Berlin, 1998-2003), Bd. 3, S. 423.
- (22) ただし、彼が挙げる作成年の天地開闢紀元六三三〇年は、八二二年九月から八二二年八月に相当しており、ズレがある。Ryden, *Life of St. Philaretos the Merciful*, pp. 45-46. 偶然かもしれないが、ニケタスが修道院に入った年は、女帝エイレーネーが失脚し、最終的にフィラレトス一族が皇帝家との繋がりを失った時期に一致する。
- (23) Bekker, I. (ed.), *Theophanes Continuatus*, (Bonn, 1838), p. 79; Lesmüller-Werner, A. & H. Thurn, (ed.), *Iosephi Genesii Regum Libri Quattuor*, (Wien, 1989), p. 35; Treadgold, W. T., *The Byzantine Revival 780-842*, (Stanford, 1988), pp. 246-247.
- (24) 拙稿「スラヴ人トーマスの乱をめぐって」『西洋における世界国家の経営と民族問題』(平成元・二年度文部省科学研究費助成金(総合研究A) 代表者合阪學・研究成果報告書)、一九九一年、一三二—一三〇頁。
- (25) Ryden, "New Forms of Hagiography," pp. 537-554; Speck, *op. cit.*, S. 676-677 (エウフロシユネーの姉妹エイレーネーについて)。
- (26) 例外は、首都にある女子修道院に自分の墓を手配したことくらいである。
- (27) 伝記中では、一族の長として旧約聖書のアブラハムとの対比が何度も確認される。25 (アブラハムやヤコブへの類似)、423 (容姿においてアブラハムに似ていた)、675, 705-6, 870 (新しいアブラハムとして)。
- (28) ただし、聖人の伝記によく見られる首都コンスタンティノープルや皇帝との関わりという要素は存在している。

- (29) Полякова, С. В., Фольклорный сюжет о счастливом глупце в некоторых памятниках агиографии VIII в., *Византийский временник* 34, 1973, стр. 130-136.
- (30) Speck, *op. cit.*, S. 204.